

塩冶地区遺跡分布調査 I

1986年3月

出雲市教育委員会

塩治地区遺跡分布調査 I

1986年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市塩治地区は、島根医科大学の開学以来、周辺は急激な宅地化が進み、遺跡が危機に直面しています。こうしたなかで、遺跡の分布を正確に把握し、また、その範囲を確認して後世に正確な記録を残すために、国庫補助事業として昭和60、61年度の両年度において、塩治地区遺跡分布調査を実施することになりました。

今年度は、上塩治町を対象として、遺跡分布調査を行なったほか、将来都市計画路線が予定されている築山遺跡の範囲確認のための発掘調査を実施し、その結果、遺跡がかなりの規模であることがわかりました。

こうした成果は、今後の出雲市の文化財保護行政の着実な発展に役立つものと確信しています。

厳しい自然条件のもと、調査にご指導ご協力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

出雲市教育委員会

教育長 石 飛 满

例　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、昭和60年度に、国庫補助事業として実施した塩冶地区遺跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、上塩冶町地内の遺跡分布調査のほか、築山遺跡の範囲確認のための発掘調査を行なった。
3. 遺跡分布調査は、昭和60年8月と昭和61年3月に行ない、発掘調査は、11月25日から12月16日まで実施した。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査指導者 田中義昭（島根大学法文学部教授）、池田尚雄（出雲市文化財審議会委員）、勝部昭（安来市立第一中学校教諭）、西尾克己（島根県教育庁文化課主事）

調査員 黒谷達典（出雲市文化財審議会委員）、片寄義春（出雲市立今市小学校教諭）、川上稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員 角田徳幸（島根大学専攻科学生）、伊田喜浩、手銭弘明、佐藤雄史（以上、島根大学学生）

事務局 今岡清（出雲市教育委員会社会教育課長）、来海弘明（同文化係長）

5. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々には多大の協力を得た。
6. 方位は調査時の磁北である。
7. 本遺跡の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。
8. 本書の執筆、編集は、川上稔が行ない、遺物の整理等には、角田徳幸、伊田喜浩、手銭弘明、佐藤雄史、柳楽散子、山本信子の各氏の協力を得た。

目　次

1. 位置と環境	1
2. 調査の概要	5
3. 築山遺跡範囲確認発掘調査	6
4. 遺跡分布調査	19
①上塩冶地区遺跡一覧表	
②上塩冶地区遺跡地図	

1. 位置と環境

出雲市塩治地区は、出雲市街地のすぐ南に位置する近郊住宅地である。島根医科大学の開学に伴い、都市計画化が進み、急速に住宅がふえつたり、市内で最も人口増加率が高い地区である。

塩治地区は、平地部は、神戸川の旧自然堤防とそれに挟まれた沖積低地からなり、前者が宅地、畠地で、後者が水田として土地利用がなされている。丘陵部は、上塩治町の東に広がり、大井谷などの小谷が山肌を抉っている。

遺跡が最も密集しているのも、この地区の特色である。沖積低地を除けば、至るところ遺跡だらけといつても過言ではない。神戸川旧自然堤防のうち、天神、塩治町付近は、弥



図1 塩治地区とその周辺の主要遺跡

- 1. 大念寺古墳
- 2. 塚山古墳
- 3. 西谷墳墓群
- 4. 長者原廐寺
- 5. 菅沢古墓
- 6. 上塩治築山古墳
- 7. 地蔵山古墳
- 8. 半分古墳
- 9. 高西遺跡
- 10. 天神遺跡
- 11. 大穴古墳
- 12. 古志遺跡
- 13. 妙蓮寺古墳
- 14. 宝塚古墳
- 15. 知井宮多聞院遺跡
- 16. 小坂古墳
- 17. 築山遺跡

生時代～中世の大集落であった天神遺跡をはじめとする集落遺跡が、かなりの面積を有している。また、上塩治町では、宮松遺跡や築山遺跡など、個々の集落はやや小さいもののかなりの数の集落が営まれている。さらには、丘陵部には、県内でも有数の横穴群である上塩治横穴群や、中世城館なども存在し、多岐にわたる豊富な文化遺産が、塩治地区を特色づけるものとなっている。

塩治地区での遺跡の初見は、昭和54年に島根県教育委員会によって発見された上塩治町三反谷遺跡であり、縄文時代にまで遡る。出土遺物は少なかったが、市内における数少ない縄文時代の遺跡として注目される。弥生時代になると、荒神谷遺跡との関連で注視されつつある矢野町所在の矢野遺跡や、大社町原山遺跡、知井宮町多聞院遺跡が営まれるが、塩治地区においても、主として天神遺跡が弥生時代中期から集落が形成され、市内でも有数の規模を誇るようになる。古墳時代になると集落は、やや縮小化の傾向があるが、引き続いて集落が営まれ、古墳時代も後期になると、大念寺古墳や築山古墳に代表される大古墳の築造にみられるような大集落が形成される。塩治地区においても、築山古墳、地蔵山古墳の国指定史跡をはじめ、半分古墳や、上塩治横穴群が連綿と造営されていく様相は、いかに塩治地区が、生活に適した地域であったかを如実に物語っている。しかし、古墳の多さにくらべて、被葬者の活躍した生活の舞台がどこであったかは、遺跡の調査が進んでいないくて、特定できないのが実情である。

奈良時代になると、天神遺跡に、掘立柱建物が検出されているが、かなりの遺構が木だ地下に埋藏されていることが推定され、かなりの大集落があったことが窺える。また宮松遺跡からも多量の同時期の須恵器が出上しており、何らかの集落があったことが推定できる。

塩冶地区遺跡分布調査築山遺跡周辺地形測量図



図2 築山道路周辺地形測量図

2. 調査の概要

塩治地区遺跡分布調査は、国庫補助事業としての昭和60年度と61年度の2カ年継続事業である。今年度は、塩治地区的うち、東半分にあたる上塩治町地内を対象として実施した。調査は、現地踏査による遺跡分布調査を行ない、地形図上に遺跡を表示する調査と、国指定史跡築山古墳のすぐ南に広がる築山遺跡の発掘調査である。

遺跡分布調査は、平野部を昭和60年8月に行ない、丘陵部は昭和61年3月に実施した。平野部の調査については、酷暑の中、黒谷達典、片寄義春の両氏にお願いして詳細な現地踏査を行ない、また、丘陵部については、嚴寒の下、島根大学専攻科学生の協力を得て実施した。

発掘調査は、将来、都市計画路線が予定されている築山遺跡の範囲確認を目的として、昭和60年11月25日から12月16日まで実施した。調査の結果、古墳時代を中心とした遺跡は、広い範囲にわたっており、出雲平野における同時期では最大級の集落が営まれていたことがわかった。



図3 遺跡分布調査対象区域（年度別）

3. 築山遺跡範囲確認発掘調査

第1トレンチ

遺構

本トレンチは、築山古墳のすぐ東側の畠地に設定した。規模は、2m×20mの南北に細長いトレンチである。表採では、遺物は少なく、築山遺跡の東端にあたると推定される地点である。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚30cm）の下に、小砾を多く含む暗褐色土層があり、さらに、その下に、遺物を含む褐色土層（層厚30cm）と、溝状遺構に堆積した黒褐色土層（層厚50cm）がある。この下は黄褐色シルト質土層（地山）となっている。

検出した遺構は、最北端の落ち込み状遺構のほか、すぐ南のピット群、中央部の落ち込み状遺構である。

最北端の落ち込み状遺構は、トレンチを斜めに北西—南東の方向に走っている。深さは、落ち込み部で、約30cmである。落ち込み状遺構のすぐ脇からは、かなり大きな円筒埴輪の



写真1 築山遺跡近景

破片があり、そのすぐ下位は、幅30cm、高さ10cmが堅緻な土層になっていた。

ピット群は、トレーナーの北端から2m～5mにわたって、8個のピットが不規則に群在していた。深さは5cm～10cmでいずれも浅いピットである。ピット中からの遺物の検出はない。

落ち込み状遺構は、上幅5mで深さ50cmのものであるが、溝（あるいは古墳の周溝）であるか、あるいは池状の落ち込みであるかはわからない。西壁付近でこの落ち込みが検出されたため東西1.5m、南北2mを西側に拡張して調査した結果、径120cm程度で深さ90cm以上のかなり深い土壌であることがわかった。土壌の上部で地下水が湧き出たため、下半部の調査は不可能であったが、ボーリングスティックでの調査では、最下部の10cmが黒色粘質土層であることがわかった。土壌の最上部で遺物を確認したほかは、それより下位での遺物の検出は調査のかぎりでは発見できなかった。また、溝中からは各種遺物が出土しているが、なかでも、溝の下底で土壌のすぐ東側から出土した子壺が16個ある子持須恵器は欠損しているが、極めて珍しい遺物である。

また、トレーナーの南端付近では30cmの段差がある段状遺構が検出されたが、幅2mのトレーナー発掘のため、性格は不明である。

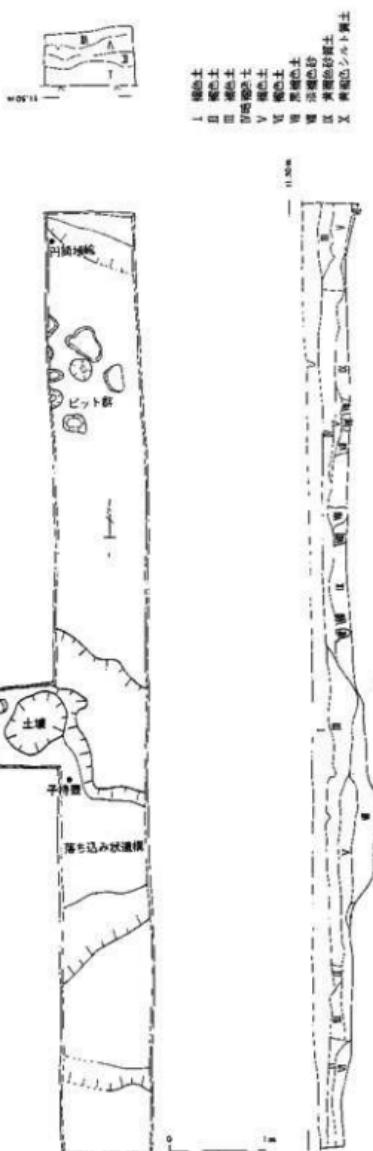


図4 第1トレーナー遺構実測図



写真2 第1トレンチ

遺物

トレンチの規模からみると出土遺物は多くはない。遺物の多くは、円筒埴輪と子持須恵器を除けば、殆ど小破片であり、トレンチ中央部と北端の落ち込み状遺構に特に集中している。北端部では、円筒埴輪片が、落ち込み状遺構との境に直立した状態で出土したほか、落ち込み状遺構の中から円筒埴輪片や、土師器、須恵器の破片が比較的多く出土した。

円筒埴輪片は、厚さ1cm、幅2cmの突帯部を残した残存高15cm、胴部径25cmのもので突帯の上下に透しがある。焼きは良好で黄褐色を呈する。

また、トレンチの中央部に検出された落ち込み状遺構からは、子持ち須恵器のほか、多くの円筒埴輪片、少量の須恵器片、土師器片が出土している。

子持須恵器は、脚付の子持

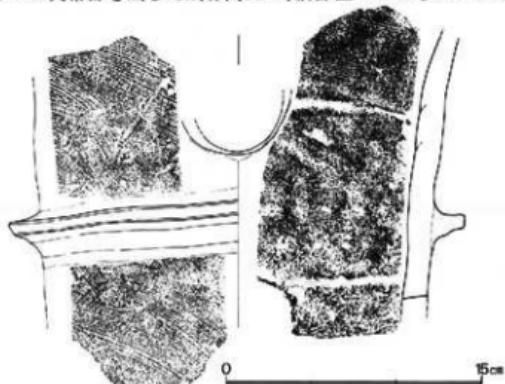


図5 円筒埴輪実測図



写真3 円筒埴輪出土状況

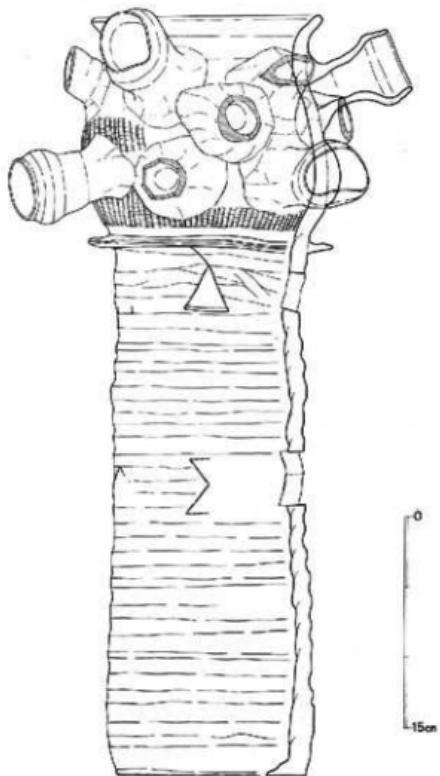


図6 子持壺実測図

壺形土器で、胴部径17cmの親壺に16個の子壺をもつ全国的にみても比類のない装飾須恵器である。親壺は、やや短く外反した口縁部の口径15cm高さ16cmで、胴部がやや膨らんだ形状を呈し、この表面に、口径7cm、長さ6.5cmの子壺を上下2~3列に配置しているが、子壺の配置に規則性はない。子壺は、親壺とは別に作ってからくっつけたもので、指による整形痕が生々しい。親壺の下は幅2cmの薄い突帯をはさんで脚がある。推定高55cmのうち、脚部の高さは39cm、底径は推定15cmで中空になってしまおり、丁寧さには今一つ欠けている。また、脚部の最上部と中央部には、三角形と形状不明の透しがある。子持須恵器は、落ち込み状遺構の最下底に直立した状態で出土し、周辺にはその破片が散乱していた。子持須恵器の傍に土壙があるが、関連



写真4 子持壺出土状況

があるかどうかは即断できない。

南端部は、遺物が少なかったが、須恵器片、土師器片以外では第2層から、長さ29cm、刃部の最大幅3cmの小刀が出土している。

第2トレンチ

造構

本トレンチは、築山古墳から20m離れた南側の畠地に設定した。規模は、4m×4mの方形のトレンチである。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚60cm）の下に暗褐色土層（層厚20cm）があり、遺物包含層となっている。さらにその下は、黄灰色土層（層厚15cm）、灰褐色砂層（層厚5cm）、黄褐色土層（層厚10cm）が続き、灰褐色砂層にいたる。黄灰色土層と黄褐色土層はいずれも、非常に堅緻で、人為的に固く締められていて、両層の間には部分的に灰褐色砂を挟ませてある。発掘地が築山古墳の横穴式石室前庭部付近にあたっているため、これに関連があるかも知れない。

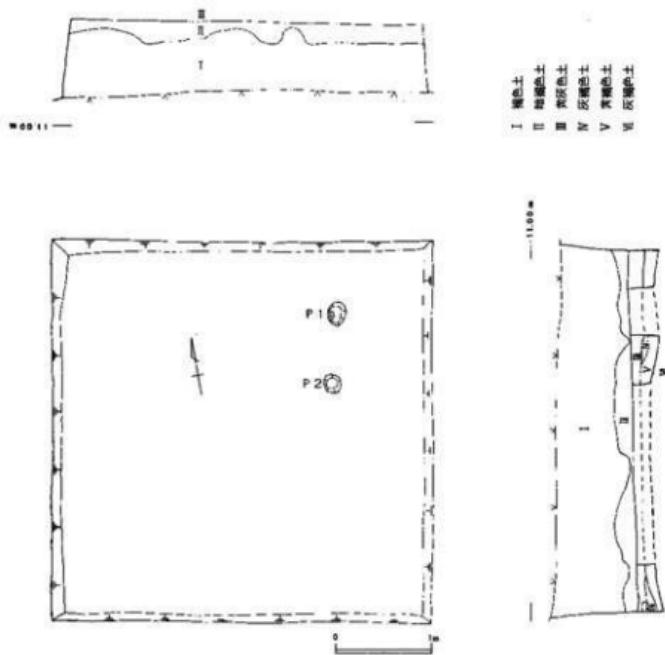


図7 第2トレンチ遺構実測図

遺構としては、ピットを2個検出した。いずれも径20cm、深さ15cmの浅いピットである。

遺物

位置からみて、遺物がかなり出土する可能性があったが、出土したのは、円筒地輪片、須恵器片、土師質土器片をあわせて10数片しかなかった。

第3トレンチ

遺構

本トレンチは、築山遺跡のほぼ中央部に所在すると推定される地点に設定した東西2m、南北5mのトレンチである。

トレンチでの層位は、耕作土層（層厚40cm）の下に遺物包含層である黒褐色上層があり、その下位は、自然堤防構成層の小礫を多く含んだ褐色砂層となっている。また、部分的にではあるが、10cmの厚さで黄褐色シルト層を挟んでいる。

トレンチ内での遺構は、トレンチが小規模な割には、遺構に伴うものがトレンチ全面にわたって検出された。殆んどはピットで11個を数える。大きさは径20cm~60cm、深さは、10cm~40cmであるが、調査面積が小さいので、遺構が確認できるものはない。ピットのほかには、溝状遺構が検出された。溝の幅は20cm~30cmで、深さは15cmである。トレンチの南端に検出され、トレンチの南へ続いている。

これらの遺構をおおう遺物包含層は10cm程度で極めて薄いが、これは、耕作によってかなり削られている可能性が強い。レベル的にみても、砂層が第2トレンチとくらべても約50cmも高く、旧地形は、かなり凹凸があったと推定される。

遺物

ピット等の遺構が多かった割には、遺物の出土量が少なかった。殆どが細片であり、器形を推定できるようなものはなかつた。その多くは土師器で、須恵器や土師質土器も多少ある。遺構に伴うものとしては、P1、P3、溝状遺構から土師器片が少量認められたに過ぎない。

また、両端部が1cmで、長さが4.7cmの管状土錐が1個出土している。その中央部は、1.8cm幅で中膨れ状を呈し、径0.5cmの穴が両端に通じている。

第4トレンチ

遺構

本トレンチは築山遺跡の南端付近にある4m×4mの方形トレンチである。

層位は、耕作上（層厚40cm）の下に黒褐色土（層厚40cm）があり、さらにその下は、暗褐色砂質土（層厚10cm）となっている。そして、地山である黄褐色シルト層が続く。

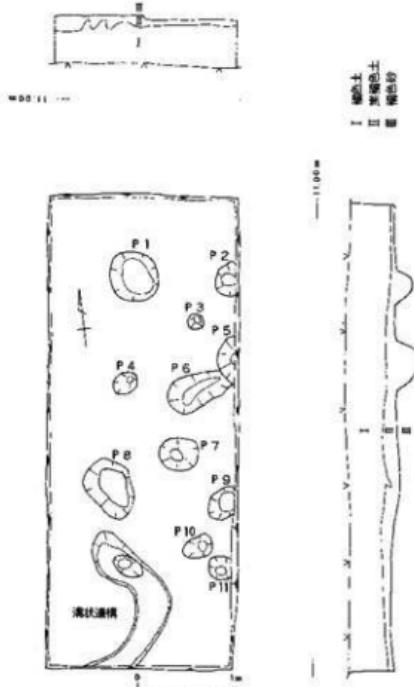


図8 第3トレンチ遺構実測図

遺構としては、数個のピットと土壤と段状遺構がある。ピットは、殆んどが段状遺構の上段にあり下段においては1個しか検出されなかった。土壤は、平面プランは長円形を呈し、60cm×100cmの東西に長いものである。段状遺構は、30cmの段差があり、西が落ち込んでいる。小トレンチのため、遺構の性格は不明であるが、中央部と南壁のすぐ北側から須恵器大甕の破碎されたものが、各1個体出土している。堅穴住居跡の可能性もある。

遺物

量的にはかなり多いが、その殆んどは段状遺構の下段の下底に押しつぶされた状態で出土した二個体の須恵器大甕である。

トレンチの南壁から出土した甕は、推定高50cmの長甕で、肩部が張り窄んだ頸部から長さ4cmの短い口縁が外反している。比較的大きな破片が多く、繋ぎた状態で出土してお

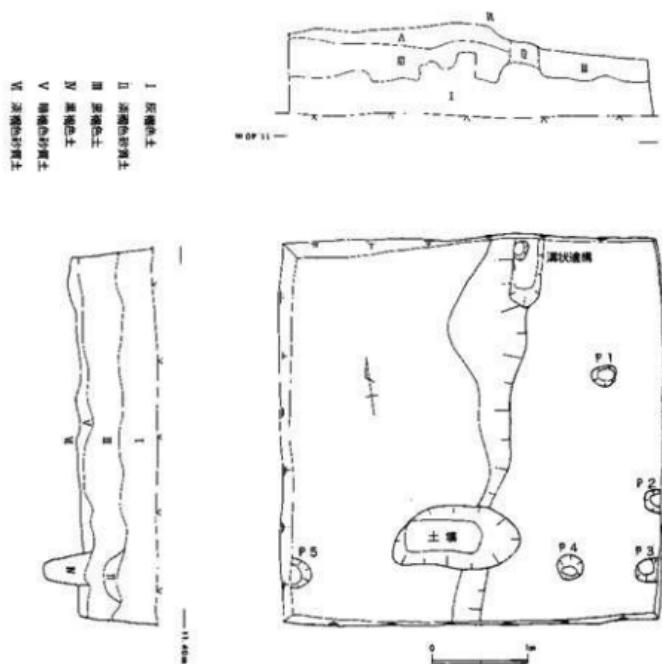


図9 第4トレンチ遺構実測図



写真5 第4トレンチ

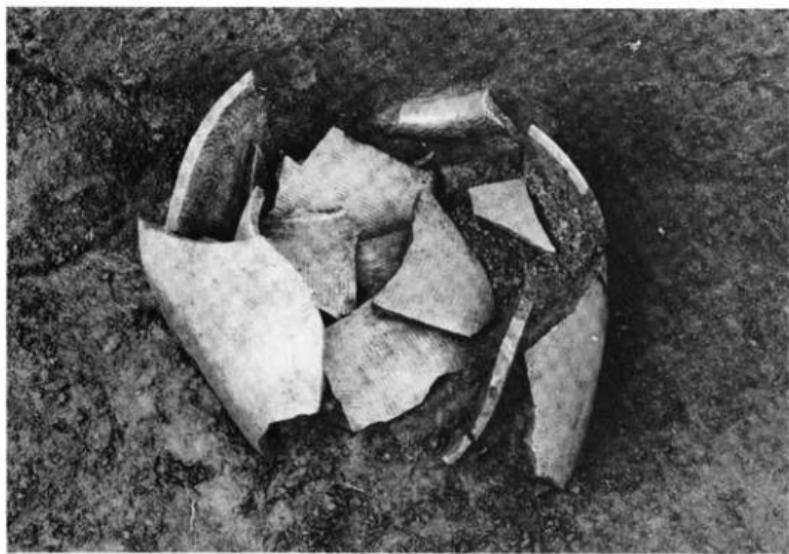


写真6 第4トレンチ遺物出土状態

り、ほぼ原形を窺い得るものであった。

トレンチ中央部から出土した甕は、原形をとどめないほどに破碎され、大きな破片だけでも1m四方に散乱していた。かなり大きな甕で、頭部から15cmの長い口縁がゆるく立ち上っている。口縁部の上から5cmには波状文が施されている。

土壙は、段状遺構よりも新しい遺構であるが、土壙内から、口径14cmの須恵器の环が出土した。破片であり、復元しても半個体分にしかならない。

その他の遺物では、土師器、土師質土器の破片が少量出土している。

第5トレンチ

遺構

本トレンチは、築山遺跡の西端で、間府川沿いに南北に低まった低地帯とその西の畠地を対象としたトレンチである。畠側には1m×4mの東西に細長いトレンチを設け、低地側には、畠側のトレンチ東端から、3.5m離れて、東への延長方向に1m×4mの細長いトレンチを設定した。

層序は、西トレンチでは、耕作土（層厚30cm）の下に、暗褐色土層、茶褐色土層があり、両層の下底は、東に向かって斜めに落ち込んでいて、溝状を呈している。また東端の最下部に茶褐色土層が僅かにみられ東に伸びている。東トレンチは、畠側よりも約1m低い。



写真7 第5トレンチ近景

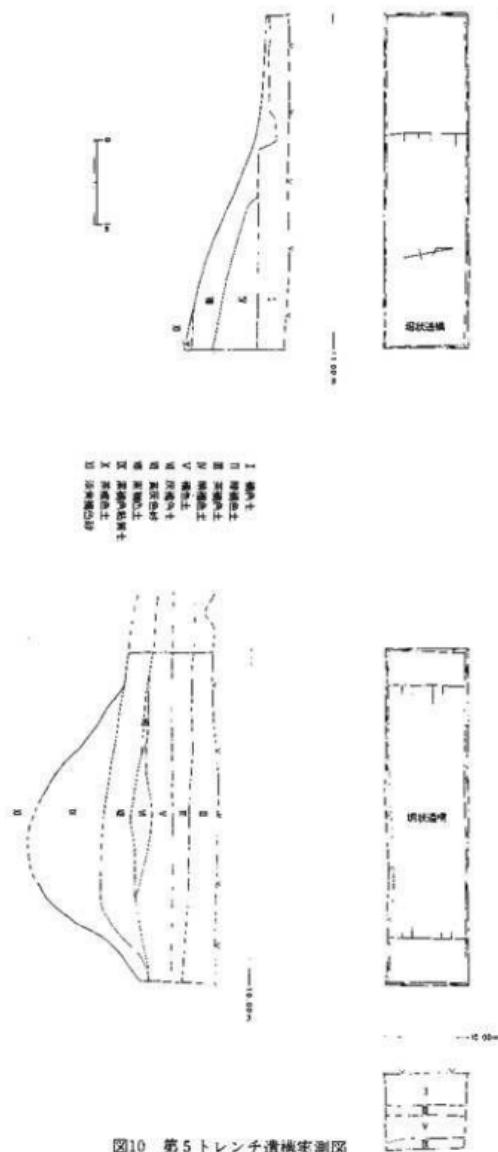


図10 第5トレンチ遺構実測図

層序は、耕作土（層厚40cm）の下に、茶褐色土層、褐色土層、灰褐色土層、黄褐色砂層、暗褐色土層、黒褐色粘質土層となっている。暗褐色土層と黒褐色粘質土層は、溝状の落ち込みをみせ、時に最下層の黒褐色粘質土層は、最大層厚が90cmを測り、かなり深く壠状に落ち込んでいる。遺物の出土はなかったが、自然流木がかなり認められた。何らかの造構になるかどうかは不明である。これから推定すると、東西を畑に挟まれた低地帯は、上幅18m、深さ3mの壠状造構を呈することになり、現在でも黒褐色粘質土層の最上部あたりで既に地下水が湧き、また土層の状況からみて、この造構が掘られたときにも、かなり滞水していたことが窺われる。

遺物

第5トレンチのうち、遺物が多く出土したのは、B区の壠状造構であるが、出土量は、意外と少ない。

A区では、須恵器、土師器、土師質土器が認められたが、壠状造構の斜面であることもあって、遺物の出土量は少なく破片のみである。

B区では、最下層部のIX層を除く全層から遺物の出土があったが、なかでも第VII層に比

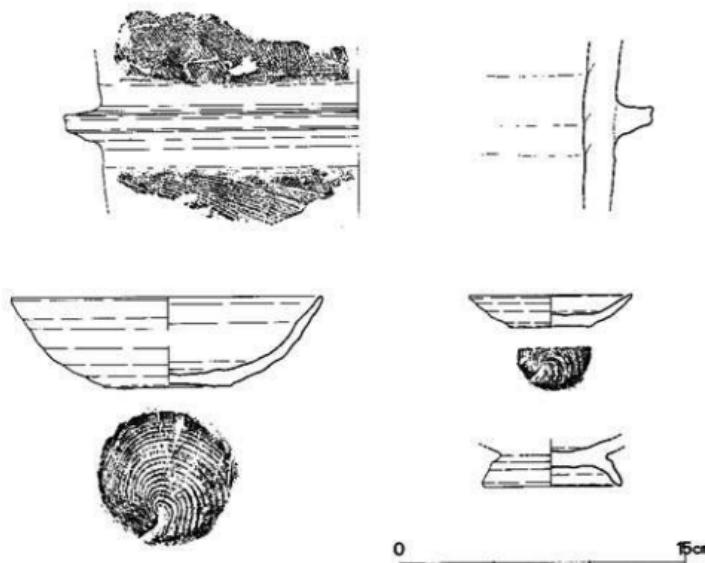


図11 第5トレンチ遺物実測図

較的多く、かつ、ほぼ原形が推定できるものがあった。第V、第VI層は出土遺物にかなり年代幅があり、擾乱されているが、VII層においても円筒埴輪片と底部に糸切り痕のある土師質土器が作出するなど二次的な堆積である可能性が強い。

堀状遺構のセクションをみても、第IV層がかなり厚く、堀状遺構の下半分は同層の堆積によっている。自然流木と推定される生木はあったものの、出土遺物が全く認められなかつたため、この堀状遺構の掘られた時期は明確にし難い。

トレンチの幅が植栽の関係上、1mしか設定できなかつたため、詳細を知ることが出来なかつたが、将来広い範囲が調査できれば、この堀状遺構の性格が判明すると思われる。

4. 遺跡分布調査

上塩治地区遺跡一覧表

番号	種別	名 称	備 考
1	散 布 地	角 田 遺 跡	土地改良の際、水路沿いから須恵器が多量に出土。
2	散 布 地	角 田 南 遺 跡	初見。角田遺跡の一部の可能性あり。
			土師器片、須恵器片を確認。
3	散 布 地	宮 松 遺 跡	都市計画路線新設の際に須恵器多量に出土。
4	古 墳	築 山 古 墳	国指定史跡。
5	散 布 地	築 山 遺 跡	昭和60年度遺跡範囲確認調査を実施。
6	散 布 地	寿 昌 寺 遺 跡	須恵器片、土師器片が畑地に散布。
7	散 布 地	池 田 遺 跡	初見。
			県道沿いの畑地から須恵器破片を確認。
8	古 墳	地 藏 山 古 墳	国指定史跡。
9	散 布 地	半 分 遺 跡	初見。須恵器破片一片を確認。 付近に古墳の可能性あり。
10	古 墳	半 分 古 墳	前方後円墳。(復元長40m)
11	城 跡	半 分 城 跡	昭和53年に西一郭を発掘調査。
12	散 布 地	下 沢 遺 跡	初見。須恵器破片1片を確認。
13	城 跡	向 山 城 跡	塩治判官高貞の居城といわれている。
14	古 墳	下 沢 古 墳	初見。径20mの円墳。
15	古 墳	普 沢 古 墳	初見。径8mの円墳。
16	城 跡	大 井 谷 城 跡	昭和53年に西一郭を発掘調査。
17	横 穴 群	上塩治横穴群	32支群107穴が現在までに確認されている。
18	古 墓	首 沢 古 墓	蔵骨器出土。
19	古代寺院跡	長 者 原 廐 守	建物遺構、占瓦などを検出。
20	散 布 地	三 反 谷 遺 跡	縄文時代から中世にかけての複合遺跡。
21	古 墳	般 若 寺 北 古 墳	初見。径20mの円墳の可能性が強い。

凡 例

1. 遺跡地図は、上塩治町を下図の通り5区分している。
2. 遺跡地図①～④は、出雲市都市計画図(2,500分の1)を2分の1に縮小し、⑤は、1万分の1地形図を2分の1に縮小して使用している。
3. 図中の記号は、次による。

- 古墳
- ▲ 横穴群
- 遺跡・散布地
- 凸 城跡
- 凸 古代寺院跡

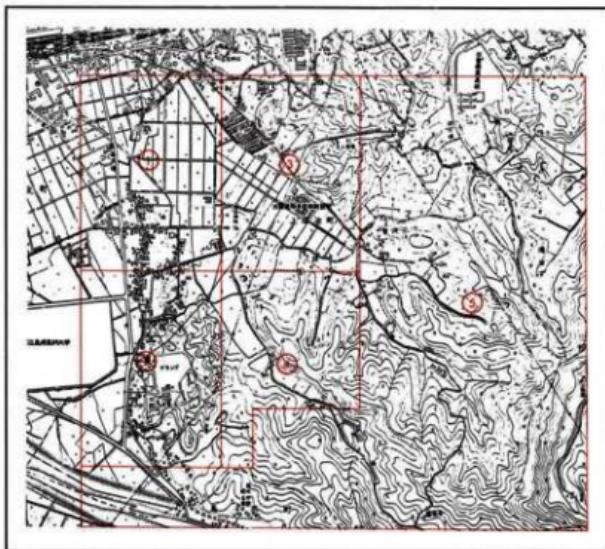


図12 遺跡地図区分図

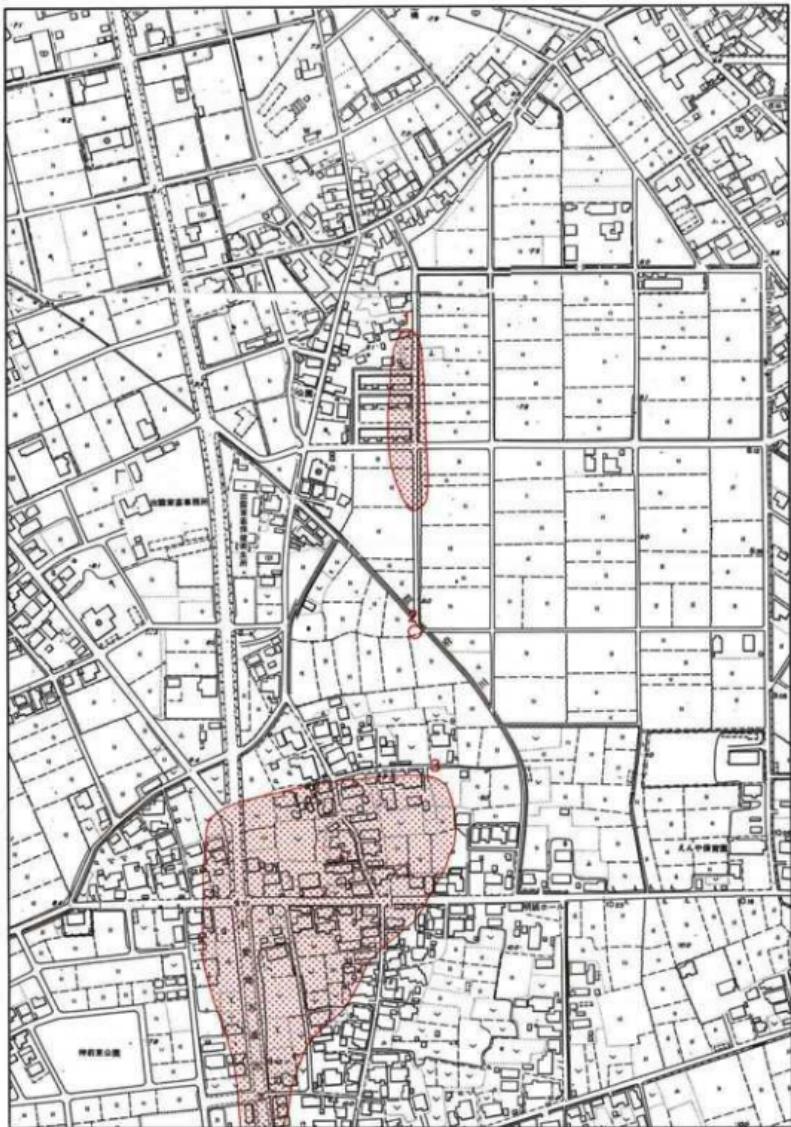


図13 遺跡地図①

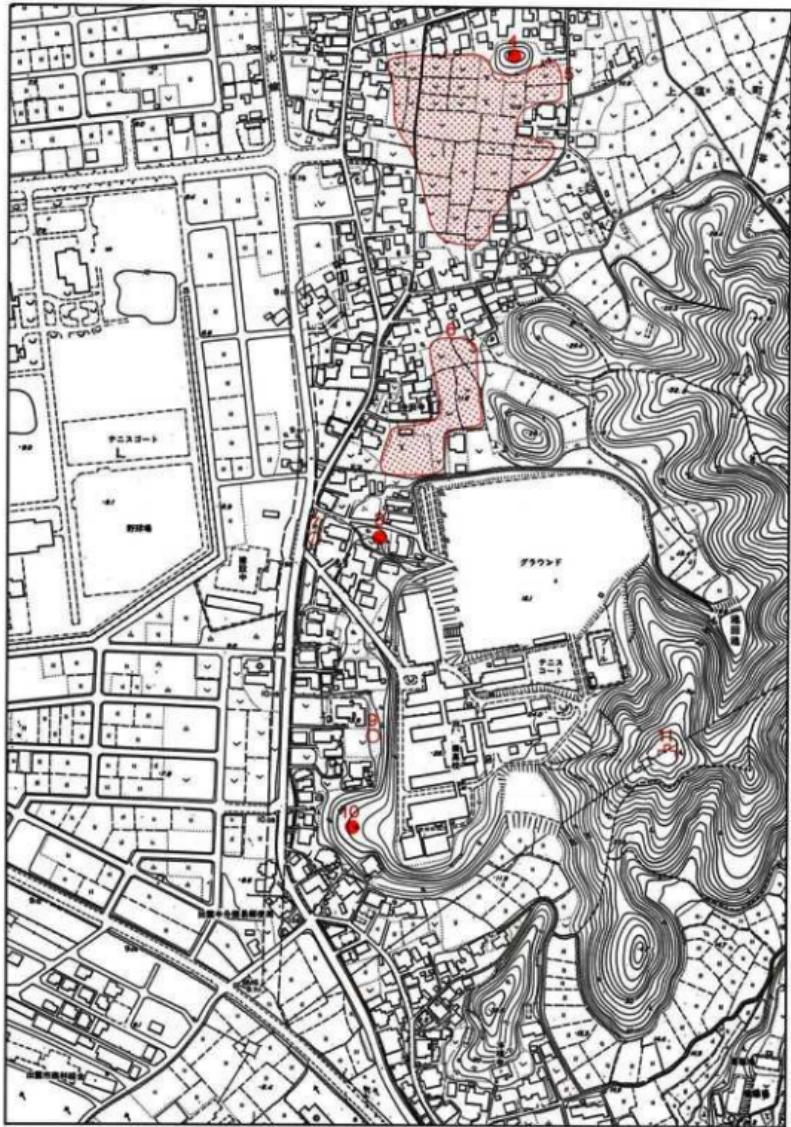


図14 遺跡地図②



図15 遺跡地図③

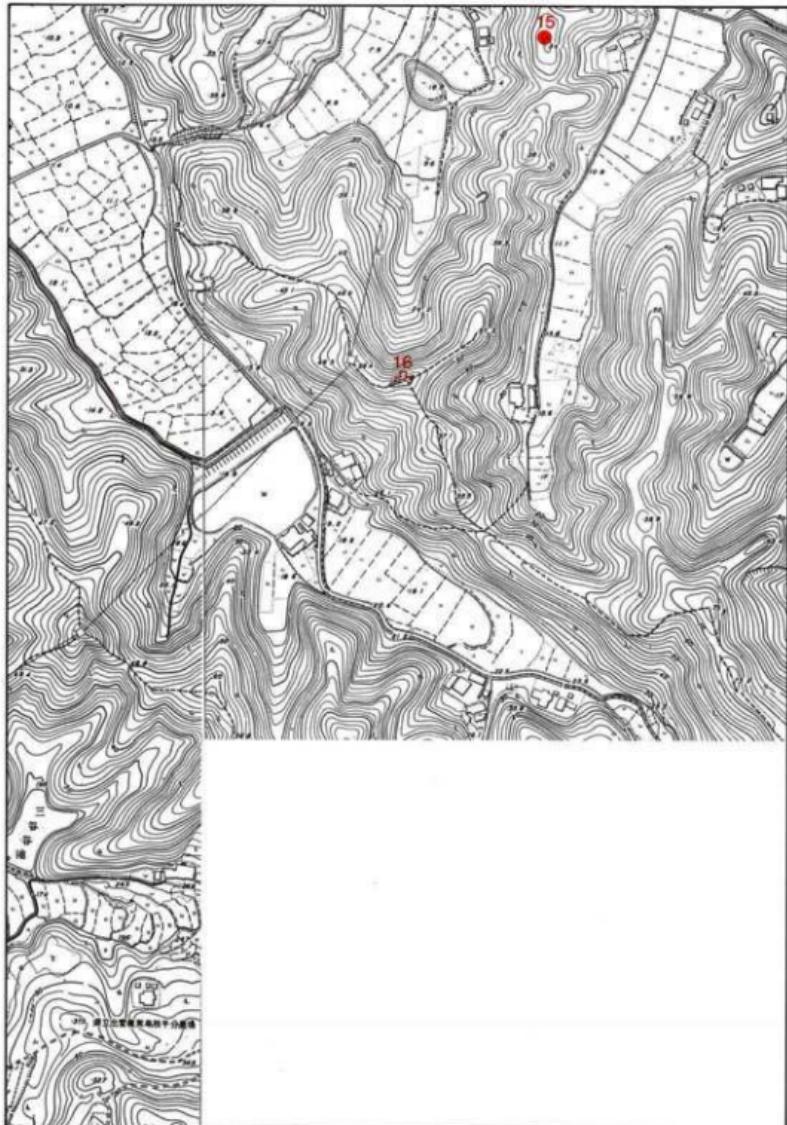


図16 遺跡地図④

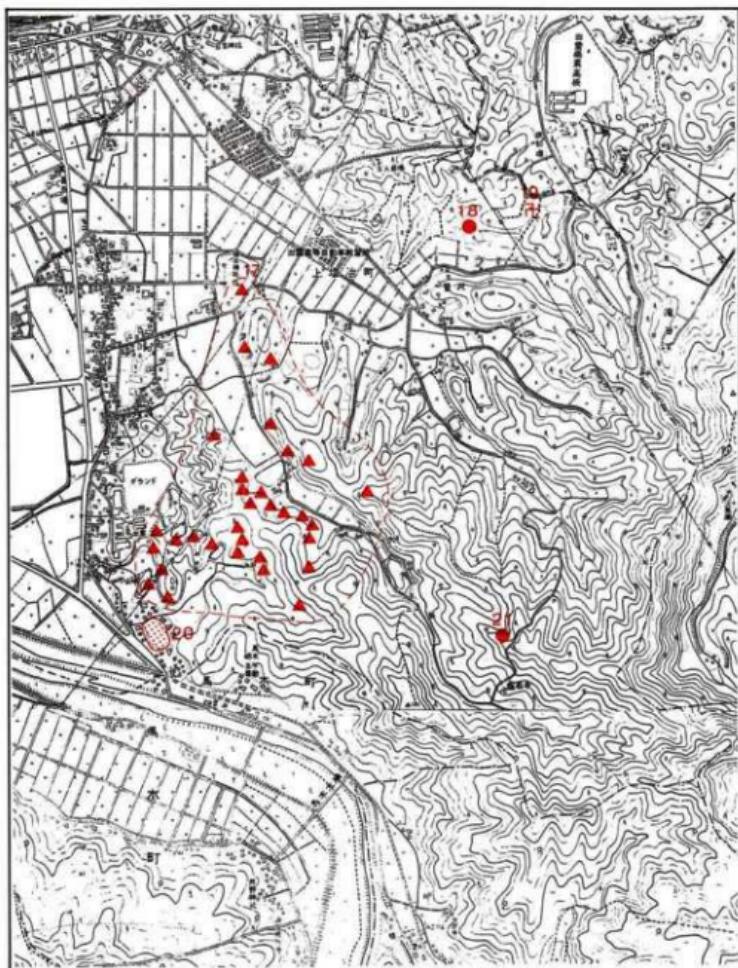


図17 遺跡地図⑤

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

塩冶地区遺跡分布調査Ⅰ

発行 出雲市教育委員会

印刷 株式会社 武永印刷